

# 退院調整場面を焦点化した多職種協働・地域連携教育の検討： アクティブラーニングを用いて

柳原 清子, 南 香奈, 津田 朗子, 岡本 理恵

## 要 旨

現代の医療の複雑化と入院期間の短縮を背景として、多職種協働と地域連携を視野に入れた退院支援の教育は必須となっている。本研究は3年次の臨床実習導入教育で、＜退院調整場面を焦点化した5事例＞を教材に、TBL (Team-Based Learning) およびポスターツアー (ジグソー法) の教育手法を用いたが、この方法が目的達成に適したものであったかを、学生の反応から評価するものである。

分析対象は、授業後に提出された75名分のレポートと自己点検アンケートで、レポートは内容分析の計量テキスト分析 (KH Coder (ver.3.) 使用) を行った。またアンケートは統計的に分析した。

レポートの内容分析では、総文数は853、総段落数は78、抽出語数33322、異なる語数1902であった。抽出語の高い出現単語は、「患者:556」「退院:400」「看護:330」「支援:329」「考える:326」等だった。さらに、共起ネットワーク (サブグラフ検出 modularity) では、＜看護-連携-地域-必要＞がネットとなり、また＜患者-支援-ケア＞と＜退院-職種-情報＞が繋がっていた。さらに、連携や協働と関係すると思われる語がどのような文脈の中で使われているか KWIC コンコーダンス機能を使って分析したところ、「橋渡し」は、多職種間の橋渡し、病棟-地域の橋渡し、患者と家族の橋渡しの3側面で記述され、語彙数の多さも兼ね合わせると、学習目標は押さえられ、かつ思考の複線化がされていることが読み取れた。またレポート中には「事例」の語が143抽出されており、具象を踏まえて多職種協働と地域連携が概念的に考察されたことが読み取れた。

TBL とポスターツアーをセットにした自己点検評価では、＜ディスカッション＞＜資料作成力＞＜プレゼン力＞＜振り返り＞は「あまり身につけていない」に1割程度の回答があったが、＜問題/課題を発見する力＞および＜問題/課題の提言力＞は「身に付いた」だった。一方授業アンケート結果では、多職種協働・地域連携への関心および理解は、「とても持てた/できた」と「もてた/できた」で99~100%だった。総じて、退院調整場面を焦点化し事例を用いたTBLでの授業設計は妥当なものだったと評価できた。

## KEY WORDS

退院調整, 地域連携, 多職種連携, 専門職連携教育, TBL とポスターツアー

## 緒言

従来から看護教育では、「継続看護」や「チーム医療」が言われてきたが、近年はより内容を具体化した「地域連携」や「退院調整」、「多職種協働 (Inter Professional Work: IPW)」という言葉に代わってきている。この言葉の変化の背景には、わが国の急激な医療情勢の変化がある。

よく言われるのが疾病構造の変化<sup>1)</sup>と超高齢化であり、医療費増大への対応としての介護保険制度 (2000年) と地域包括ケアシステム (2016年) の導入がある。この地域包括ケアシステム<sup>2)</sup>は、それまで言われていた保健・医療・福祉システムの考えを、コミュニティ全体を視野に入れたものとしている。具体的には＜住まいと住まい方＞という表現での、住環境やエリア環

境（道路や交通など）を加味し、さらに<医療・看護><介護・リハビリテーション><保健・福祉>と名打って、生活支援を前面に出している。言うなればより包括的に構造化され、地域マネジメント的視点を入れたところに特徴がある。

このシステムのもとでは、医療・保健のみならず福祉、行政などの多様な専門職が支援ネットワークを組む必要性があり、医療のチーム化だけではない、多職種協働の協働的支援の意味が含まれている<sup>3-5)</sup>。

一方医療機関の中では、救急・急性期医療、がん治療等で医療技術が高度化・先端化している。それともなって業務が細分化/専門職化し、多様な専門職が生まれてきている。こうした状況下では概して縦割りのシステムのひずみが生じ、医療事故や医療倫理の問題が発生してくる<sup>6)</sup>。

したがって、多職種協働の考え方とシステム整備および看護機能としても「調整」が発揮できなければ、患者・家族の安全、安寧、QOLおよび尊厳は守られない。現実としての入院期間の短縮化があり、地域包括ケアシステムにつなげていく役割として、看護師等による退院調整機能は重要さを増している<sup>7-8)</sup>。

さて、これらの言葉を研究論文数の推移（医中誌）で見ると、キーワード「多職種協働：IPW」で「会議録除く」「最近の5年間（2013-2018年）」では、951件ヒットし、それ以前の5年間（2008-2012年）は353件である。これをキーワード「看護教育×多職種協働：IPW」で「会議録除く」「最近5年間」は20件、その前は7件であり、急速に「多職種協働：IPW」の言葉が拡がり、看護教育でも取り上げられてきていることがわかる。

この拡がり、多職種協働（IPW）が多職種連携教育（Inter Professional Education 以下 IPE）と一体となって提唱されていることとも関係している。WHOは2010年<sup>9)</sup>に、<健康アウトカムの改善に向けて連携医療を推進するための行動>や<システムレベルで専門職連携教育と連携医療を支援するための行動>を提唱し、看護学でも他の学部との協働および対等な協力関係のもとに運営するプログラムが開発されてきている<sup>10)</sup>。

以上の問題意識に基づき、3年次の臨床実習導入教育で、「退院調整場面を焦点化した多職種協働・地域連携教育」を計画した。

なお教育方法として、アクティブラーニング（能動的学修）のTBL（Team-based Learning 以下 TBL）と、ポスターツアー方式のプレゼンテーションを取り入れた。このTBLは、チームを意識化し、グループを使っ

た課題解決型学習<sup>11)</sup>であり、ポスターツアーはジグソー法の教え合いの教育技法である<sup>12)</sup>。これらの教育手法は、研究者らの所属機関である「A大学グローバルスタンダード（KUGS）」の「KUGS3: 考え・価値観を表現する」<sup>13)</sup>の能力獲得をねらいとして、具体化し展開したものである。

本研究はこの教育方法が目的達成に適したものであったかを、学生の反応から評価するものである。

## 実習前演習：『退院調整・多職種協働・地域連携』学習の実際

### 1. 科目の位置づけと演習のねらい、組み立て

3年次の本格的な臨床実習直前の、「演習科目1単位（30時間）20コマの内の5コマ」を使用した。

（1）ねらいは<病院の退院調整場面を焦点化し、多職種協働・地域連携の2つの視点で、看護師が果たす役割について、具体的なイメージ化を図りつつ、支援を考えることができる>である。（2）TBLチームは1グループ5名とし、1年次でのPBL（Problem Based Learning）チームを継続した。（3）学生へのオリエンテーションは演習開始前に行い、その際課題も提示してキーワードを中心としたレジュメ作成を課題とした。（4）プログラムは、講義：1コマ、TBLチームでのグループディスカッションとポスター作製：2コマ、ポスターツアー：2コマとした。（5）フィードバックは、学生相互評価を通して優秀発表グループの選出と退院調整看護師からの1つ1つのポスターに関する講評で行った。

このTBLには、臨床の退院支援部門看護管理者1名と病棟の退院調整看護師3名にファシリテーター（Active Learning Adviser）として参加してもらい、また教員4名も加わって計8名でTBLグループワークのファシリテートを行った。

### 2. プログラムの学習目標と事例の内容

#### （1）学習目的

1）多職種および地域包括ケアシステム下での協働と地域連携－病院の退院調整場面を焦点化し、多職種協働・地域包括ケアシステム下での地域連携の2つの視点で、看護師が果たす役割について、具体的なイメージ化を図りつつ、支援を考えることができる。

2）看護実習での場面の想起から、クリティカルシンキング力（吟味する力）を身に付けることができる。

3）TBLおよびポスターツアーを通して、小グループで主体的に、課題解決およびプレゼンテーションとディスカッションを行い、知見の共有がはかれる。

## (2) TBL の学習目標とポスターツアーのねらい

TBL では、①解決すべき課題は何であるか、問題の本質はどこにあるかを自ら発見していく力を身につける。②小グループで協働（コミュニケーション）できる力を身につける。③問題/課題の解決に向けた方略を示す力（課題達成力/解決力）を身につける。④具体的な、ディスカッション力、リサーチ力、プレゼンテーション力を身につける。⑤学習達成度を自己評価/他者評価ができる、である。またポスターツアーはジグソー法の教えあいの技法であり、一人ひとりが教師役のプレゼンターとなる<sup>12)</sup>。ここでのねらいは①一人ひとりがポスターの前に立ってプレゼンテーションができる。②伝えるべき情報やデータを見分けることができる。③相手に伝える力を身に着ける。④内容に責任をもってプレゼンテーションできる、である。

## (3) TBL の課題

学生に提示した課題は以下である。

あなた（方）の病棟では、退院支援（退院調整）に関して、気がかりの患者さんがいます。ディスカッションを通して、事例の退院時と退院後の生活をイメージしての課題を明確にして、支援方法を見出してください。

## (4) 5 つの事例のタイトルと学習課題

事例は赤ちゃんから成人、高齢者までの発達/生活課題を踏まえた対象設定と、地域包括ケアにおける、在宅医療、介護、療育、リハビリテーション、家族調整、住宅やエリア環境の課題を網羅したものを準備した。5 事例のタイトルと学習コンテンツは下記である。

1) 入退院を繰り返す障害をもった赤ちゃんと家族への退院支援：誤嚥性肺炎、不適切な療養環境、療育スキル不足、重度障害児と家族

2) 認知症のある老夫婦 2 人暮らしの退院支援：入院をきっかけに認知症が発覚、認知症の配偶者、認知症夫婦 2 人暮らし

3) 終末期で症状コントロールの必要な人の退院支援：終末期がん患者、壮年期、複雑な医療処置、病状否認、サポート不足

4) 病院で半寝たきり状態になった人と家族への退院支援：高齢者、3 ヶ月間の入院、廃用症候群、意欲低下、地域包括ケアシステム

5) 住宅環境や通院の交通機関に課題のある人の退院支援：神経難病、初老期、僻地の住まい、介護保険サービスと住宅改造

## 3. レポート課題

【退院場面における地域連携、多職種協働に関してディスカッションとポスターツアーを通して考えたことを、副題をつけて、600～800 文字で書くこと】

## 研究方法

### 1. 対象と分析方法

対象はレポートと自己点検アンケートである

#### (1) レポート

A 大学看護学専攻 3 年生で、研究同意の得られた者のレポート 75 名分を分析対象とした。レポートは内容分析の計量テキスト分析（KH Coder (ver.3.) 使用）を行った。

KH Coder とは<sup>14)</sup>、テキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアであり、「計量テキスト分析」または「テキストマイニング」と呼ばれる方法に対応している。この KH Coder を使った研究論文としては、議事録の分析や新聞報道の分析、教科書や学生レポート等多岐にわたるテキストマイニングが行われており看護教育のレポート分析等でも活用されている<sup>15)</sup>。分析は①各品詞の出現頻度を見る②各品詞を強制抽出し、共起ネットワークを検出する③KWIC コンコーダンスにて、「地域連携」や「多職種連携」に関連する語が出現する文を抽出し、それらの語の前後にどのような単語が付随するか、また抽出した文の内容がどのような傾向があるかを見た。なお KWIC とは keyword in context の略語である。文章中から指定したキーワードにその前後の文脈を取り出して索引を作ることで検索効率を高めることができる<sup>16)</sup>。

#### (2) 授業後の自己点検アンケート

授業に臨んでの自己点検アンケートの質問項目は、Q1 提示されたケースの<問題/課題の本質はどこにあるかを発見していく力>は身につきましたか？

Q2 提示されたケースに関して<問題/課題の解決に向けて提言する力>は身につきましたか？

Q3 プロジェクトのメンバーとディスカッションする力は身につきましたか？

Q4 <効果的な資料（小ポスター）を作る力>は身につきましたか？

Q5 ポスターツアーで<プレゼンテーション力>は身につきましたか？

Q6 プロジェクトメンバー同士で<成果物（小ポスター）および発表過程に関する振り返る力>は身につきましたか？であった。

回答は「身についた」から「まあ身についた」「あまり身につけていない」「まったく身につけていない」ま

での4件法で答えるものである。これらは学内学習支援システム(LMS)での提出とした。

2. 倫理的配慮

学生には、研究目的と共に研究協力は自由意志であること、成績には関係しないこと、プライバシーは保たれることを口頭と文書で説明し、同意書を得た。また研究者らの所属する大学の医学倫理研究審査委員会の承認を得た(承認番号:866-1号)。

結果

1. レポートの内容分析

(1). 品詞の出現頻度(表1)

レポートの内容分析では、総文数は853、総段落数は78、抽出語数33322、異なり語数1902であった。抽出語の高い出現単語は、名詞とサ変名詞で、「患者:556」「退院:400」「看護:330」「支援:329」「考える:326」「職

種:269」「地域:207」「連携:202」「生活:188」「情報:114」だった。また動詞は「考える:326」「行う:132」「思う:74」であり、形容動詞やナイ形容では「必要:203」「問題:79」「重要:63」「様々:51」であった。

TBLは課題を解決していくことを目的としており、「考える」「思う」の語や「必要」「問題」とクリティカルシンキング的な語が多いことが読み取れる。また「様々:51」の語からは事例の多様さを感じ取って、意味内容を説明しようとしていることが読み取れた。

2. 共起ネットワーク(図1)

レポート文中にある単語の共起性を共起ネットワーク(サブグラフ検出 modularity)でみた。図1は、強い共起関係ほど太い実践で示し、破線は弱い関係を示す。また出現数の多い単語を大きな円で表し、円の大きさと出現数がわかるものである。単語のネットワー

表1 品詞の主な出現頻度

名詞	サ変名詞	形容動詞	ナイ形容	動詞	形容詞						
患者	556	退院	400	必要	203	問題	79	考える	326	難しい	19
職種	269	看護	330	重要	63	仕方	4	行う	132	良い	18
地域	207	支援	329	様々	51	違い	3	思う	74	多い	17
家族	159	連携	202	大切	45	限り	1	感じる	55	深い	8
事例	143	生活	188	不安	18	頼り	1	学ぶ	44	大きい	8
情報	114	入院	70	困難	14			関わる	40	近い	6
ケア	102	訪問	49	可能	12			知る	38	高い	6

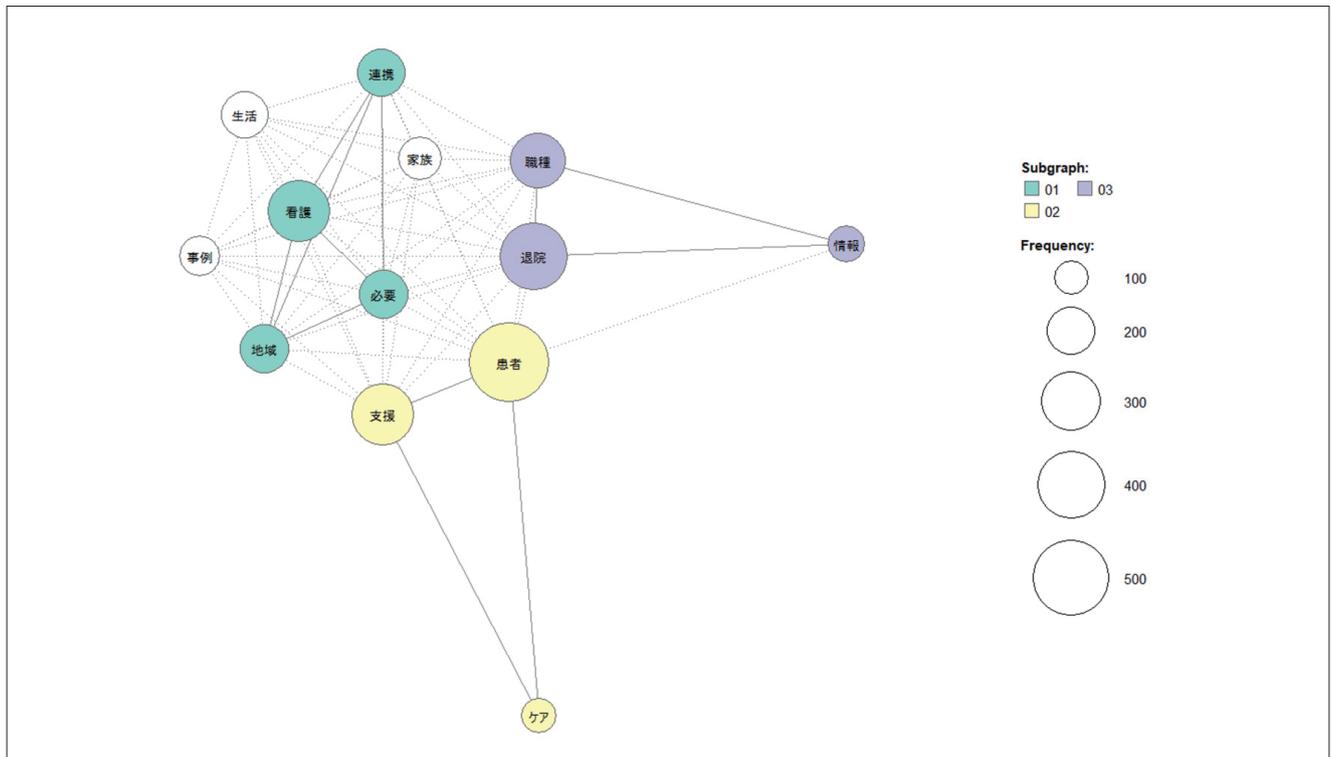


図1 共起ネットワーク

表 2 KWIC コンコーダンスでの「橋渡し」の文脈

考えていかなければならない点であると思った。2つ目として、多職種との ので、積極的にその問題を解決するための助け・サポートを得るための多職種との ピアサポートグループなどの連携もあった。患者さんが病棟から地域に戻っていくとき 全てが機能しないのからだ。つまり、チーム医療において、看護職は非常に多くの職種の 師の存在に改めてその重要性を強く感じた。それと同時に他職種と連携をとることや して支援を行っていた。特に看護師は、多職種と患者・家族との連携の の地域で暮らしていけるように支援・指導し、患者と地域と病院などの支援施設との あるのでこの強みを最大限に生かして他職種に協力を依頼するという患者と他職種との 上げることができるが、常に患者さんに対応したものでなければならない。看護師が「	橋渡し	的な役割を果たすことである。入院中の患者に一番長く、身近な存在として接し普段の
	橋渡し	となることを求められていると考えた。これから実習に行くうえで、患者の退院支援に
	橋渡し	となっているのが地域医療連携室のようなところで、病棟看護師から伝えられた情報
	橋渡し	を行うと同時に、そのチームの中に患者及びその家族が含まれることを常に念頭に置く必要
	橋渡し	を行うことはそう簡単ではないと思った。実習では患者さんの支援のために必要
	橋渡し	役として大事な役割を担っていると感じた。多職種協働では、病院内のかかわり
	橋渡し	をすることも看護師の役割だと考えた。まず、患者さんが退院した後どのような
	橋渡し	を行うことで患者の抱えている問題を解決につながる看護を提供できるのではないかと
	橋渡し	という役割を發揮するために、その発言力が必要なのだと学んだ。

クは3つあった。1つは<看護-連携-地域-必要>であり、頻出を意味する大きな円の「看護」に周囲の「生活」がつながり「地域」や「連携」ともつながっていた。ここからは《「生活」の場の「地域」で「連携」して「看護」する「必要」がある》と考えたことが読み取れる。また<患者-支援-ケア>のまつまりでは、大きな円の「患者」に、「家族」と「事例」がつながっていた。つまり《「事例」で提示された「生活」を営む「家族」と「患者」に、「支援」と「ケア」を行う》が読み取れる。もう1つの<退院-職種-情報>のネットワークは、大きな円の「退院」に「職種」と「情報」がつながり《「退院」支援には「職種」の間での「情報」が大事》と学生が理解していたことが読み取れる。

### 3. KWICによる「多職種協働」「地域連携」に関する記述分析(表2)

本学習での中心をなす連携や協働と関係すると思われる語がどのような文脈の中で使われているかKWICコンコーダンス機能を使って分析した。まず、品詞の出現一覧の中から、「つなぐ:15」「つながる:14」「つなげる:14」「合わせる:6」「橋渡し:9」「協力:31」を選び出して分析した。「つなぐ」は、<~することが安心につながる>という因果関係の文脈と、施設や人と文字通りに結びつけるという文脈、<~が安心へとつながる>という継続されていく様の文脈で使われていた。また「つなげる」には、つなぐの因果関係的と、結びつける文脈に加えて、<~をしてより良いケアにつなげる>という未来志向的な拡充していく、という文脈があった。また「橋渡し」や「協力」は、看護師の周囲の多職種間の橋渡し、病棟(システム)-地域(システム)間の橋渡し、患者と家族員の家族内(システム)の3つの文脈で記述されていた。さらに「合わせる」は、相手のニーズや状態に合致させる意味と、力を合わせる協働の意味で使われていた。一方で「橋渡し」は学生の日常語のような表現である。表2にKWICの例としてまとめたが、その文脈は<多職種間

の橋渡し>、<病棟-地域の橋渡し>、<患者と家族の橋渡し>の3つの文脈で記述されていた。さらに「協力」の語は、人々の協力、職種の協力を述べているが、誰と誰の協力かに注目してみると、医療職種間での協力、家族内での協力、病院看護師と家族や病院看護師と他組織の専門職との協力に分けられた。レポートには専門職種名が具体的に数多く挙げられており、また、「事例」の語が143抽出されており、事例から具体性をもって思考されていたことが読み取れた。

### 4. 自己点検アンケート(図2)

授業後の自己点検アンケートでは、多職種協働・地域連携の関心と理解は、「とても関心をもてた」が41名(55%)で「関心をもてた」が33名(44%)、「どちらでもない」が1名であった。また「とても理解できた」は31名(41%)、「理解できた」が44名(59%)だった。

TBLに関する「問題/課題の本質を発見していく力」と「問題/課題の解決に向けて提言する力」は、共に「身についた」が41%で「少し身についた」が59%だった。「ディスカッション力」は「身についた」が47名(63%)で、「あまり身につかなかった」が3名(4%)いた。「効果的な資料(小ポスター)を作る力」は、「身についた」が20名(27%)で、「あまり身につかなかった」が12名(16%)いた。「プレゼンテーション力」および「メンバー間での振り返る力」も「身についた」が20~22名(27~29%)で、「あまり身につかなかった」が7~9名(9~12%)であった。

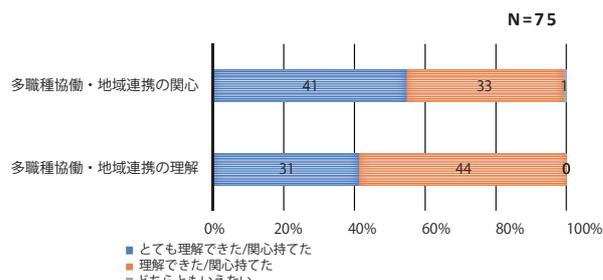


図 2 多職種協働・地域連携の関心と理解

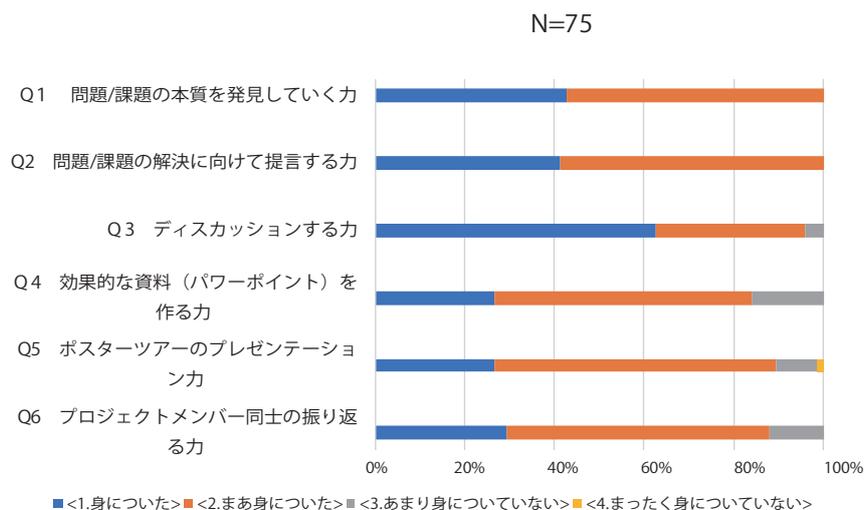


図3 TBLの自己評価

## 考察

### 1. 退院調整場面を焦点化した多職種協働・地域連携の学びの内容と授業評価

今回の授業は、臨床実習直前の演習であり、学生が実習における看護過程で多職種協働、地域連携を加味したアセスメントおよび退院調整の計画が立てられることをねらいとしたものだった。

レポートのテキストマイニングでの品詞の出現頻度では、「患者」「退院」「看護」「職種」「地域」「連携」が高く、さらに「考える」「思う」の語があり、学習目標にあげた内容が考察されていることが推察された。同時に共起ネットワークを文章化すると、「生活」の場である「地域」で「連携」して「看護」する「必要」がある、「事例」で提示された「生活」を営む「家族」と「患者」に「支援」と「ケア」を行う、「退院」支援には「職種」の間での「情報」が大事であるが描いた。これらは学生が事例を読み解いた結果としての主張(考察)の柱であったが、本授業の学習目標と一致しており、目標が学生自身の言葉になっていたことが読み取れる。

同時に、本授業の中核をなす「連携」や「協働」が、どのような文脈として思考され表現されているかをKWICで分析したが、関連語は「つなぐ」「つながる」「つなげる」「橋渡し」「合わせる」「協力」であった。これらは、～をしてより～につなげるという未来志向的な拡充の文脈でも使われていた。また「橋渡し」や「協力」は、看護師の周囲の多職種間の橋渡し、病棟(システム)–地域(システム)間の橋渡し、患者と家族員の家族内(システム)の3つの文脈で記述されており、協働や連携は(システム的に)横に広がっていくものとして、また未来思考であることが表現されていた。こ

の内容はWHOが提言している<sup>9)</sup>、多職種協働(IPW)の考え方、および協働システムの整備および「退院調整」の機能が発揮されることの重要性、と一致するものだった。

さらにレポートの語彙の豊かさも加味すると、論旨(学習目標)を中心として、学生の思考が複線化されていることが読み取れた。思考が複線化するとは、結論を導き出すときに、思考法を絡み合わせて、(混線ではなく)複線で結論を導き出すことである<sup>17)</sup>。

多職種協働や地域連携は医療の理念として、ともすれば抽象度が高いままで学生に認識されていくことが多いが、本演習では、クリティカルシンキング的態度<sup>18)</sup>、すなわち明確な主張や理由を求める「論理的思考態度」、主観にとらわれず多面的、公平にものごとをみる「客観性」、これらの土台となる情報を鵜呑みにせず、じっくり考える「熟慮」的態度があったことが推察された。

一方で「システム」の語が少なく、連携や協働におけるシステムティックな思考はされていず、あくまで個人の患者・家族のための支援に留まっていた。連携や協働の主体者になろうとする時、組織や地域の俯瞰力というシステムシンキング<sup>19)</sup>は必須であり、システムシンキングの教育強化が示唆された。

### 2. 教育手法の評価：TBLおよびポスターツアー、教材

本授業はTBLとポスターツアーをセットにして行ったところに特徴がある。背景としてこの学生たちが一年次に行ったPBL(Problem-based learning)は、通常のプレゼンテーションを行ったが<sup>20)</sup>、学生間での役割および責任の不公平等も含めプレゼンテーション力がついていないのでは、が課題としてあったことによる。

TBL とポスターツアーの自己点検評価では、〈問題 / 課題を発見する力〉および〈問題 / 課題の提言力〉は「身に付いた」だったが、ポスターツアー（ジグソー法）で強化をはかる、〈資料を作成〉し、ツアーグループメンバー間で〈ディスカッション（作戦会議）〉して〈プレゼンテーション〉に臨み、〈振り返り〉を行う、という教え合いの技法に関しては、「あまり身につけていない」が 1 割程度の回答があった。1 年次の PBL とはアンケートの質問内容が異なっているため比較はできないが、学生のレポート記述では、《自分のプレゼンテーション力はまだまだ見直すべき点が多いと反省した。具体的には、カンニングペーパーなしで頭の中で文章を組み立てて話すことができていないため、口から出てくるのが単語になってしまう》ことや《話そうと思っていること自体ちゃんと理解できていないこともあり、要点があいまいで相手に伝えきれない》など、1 年次と同様の内容であった。

このことは学生の課題発見等は力をつけてきているが、教え合いで知を自分のものにして、他者に伝えることは難しいことを物語っている。ジグソー法は、課題の専門化（ある事例の課題に長けているという個別化）によって必然的に、学生間に「相互依存」が起り、互いが情報提供者（専門化）として接し合う協調学習が構造化されている<sup>12)</sup>。したがって今後もこの手法を活用しながらの教育プログラムを組んでいく必要がある。

また TBL の前提<sup>11)</sup>には、〈チームが取り組む課題は、学習を促しかつグループの成長を促進するための教材準備の重要性〉があげられている。本演習では、TBL 課題を『退院間近の対象の退院支援を計画すること』とし、5 つの多様な事例を準備し、白衣姿の退院調整看護師にファシリテーター（ALA）として入ってもらった。これらは実習直前のこの時に、臨床のリアリティと緊張を演出し、学習モチベーションを高めるための教材準備であり演出であった。

上田は「プロジェクト・ベースド・ラーニングからパッション・ベースド・ラーニングへ」<sup>21)</sup>と題して、学生がリアリティとモチベーション / パッションを持てるようなテーマ設定およびプロジェクト課題の重要性を述べている。本授業後の自己点検アンケートでは、多職種協働・地域連携の関心と理解は、「とても関心をもてた / 理解できた」が半数強で、「関心をもてた / 理解できた」を合わせると 9 割強にも達し、モチベーション / パッションが持っていたことが明らかとなった。

ともすれば看護学の演習は、やらされに近い感慨を学生が持つことが少なくない。今回の TBL では、いかにしてパッション /モチベーションを高め、概念に結

び付けていくかを工夫したのであるが、パッションという精神的な部分と「理論 / 学問との接続」というロジカルものを結び付けていく、という教育技法<sup>22)</sup>が功を奏したものとなった。

## 結論

結論は以下である。

① 75 名分のレポートの内容分析では、総文数は 853、抽出語数 33322、異なり語数 19022 で、単語の共起ネットワークは、〈看護－連携－地域－必要〉、〈患者－支援－ケア〉と〈退院－職種－情報〉がネットとなっていた。これは学習目的と合致していた。

② KWIC で、連携や協働と関係する語の「橋渡し」は、多職種間の橋渡し、病棟－地域の橋渡し、患者と家族の橋渡しの 3 側面で、また「合わせる」は、相手のニーズや状態に合致させる意味と、力を合わせる協働の文脈であった。語彙、文脈は豊かで思考の複線化が読み取れた。

③ アンケート結果では、多職種協働・地域連携への関心と理解は、「とてももてた」「もてた」が共に 90% 以上で、学習へのモチベーションは高かった。

TBL およびポスターツアーの自己点検では、〈問題 / 課題を発見する力〉および〈問題 / 課題の提言力〉は「身についた」であったが、〈ディスカッション力〉〈資料作成力〉〈プレゼンテーション力〉〈振り返り〉は「あまり身につけていない / 身につけていない」に 4～16% の回答があった。今回の方法においては、これらの達成は十分とはいえない。

## 本研究の限界と今後の展開

本演習授業は臨床実習開始直前の時期の 3 年次生への多職種協働・地域連携に関する単発的演習であり、実習導入の意味合いだった。したがって、この学びが実習での看護過程における、アセスメントや看護計画にどう活かされていったのか、の今後の検討が必要である。また本研究は 1 つの単元の演習授業の検討であり、看護カリキュラム全体を俯瞰しての多職種協働・地域連携の学習分析ではなかった。多職種協働・地域連携の教育は、看護学概論や在宅看護論、公衆衛生看護学、老年看護学等の各論でも取り上げられているが、今後カリキュラム上で多職種協働・地域連携の学習コンテンツがどのように積みあがっていくのか、カリキュラムマップ等で現行のものを検討し、さらに 4 年次に計画されている多職種連携学習（Interprofessional Education : IPE）の教育プログラムの開発に役立てていく必要がある。

## 参考文献

- 1) 別府志海, 高橋重郷 (2015): 疾病構造と平均健康期間・平均受療期間の人口学的分析-疾病構造別にみたライフスパン-, 人口問題研究 71 (1), 28-47
- 2) 厚生労働省 (2016): 地域包括ケア研究会>地域包括ケアシステムと地域マネジメント (<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12400000-Hokenkyoku/0000126435.pdf>, 3, 3. 11. 2019)
- 3) 吉田紀子, 竹島良子, 儀保景子, 他 (2015): プライマリケアの視点からの多職種協働統合医療と地域づくり研究 (第1報), 地域における多職種協働 Holistic Health Promotion Program (HHPP) の介護予防効果検証, 日本統合医療学会誌 8 (1), 65-81
- 4) 松岡千代, 松岡克尚 (2018): 高齢者のエンド・オブ・ライフケアにおける多職種連携の課題と展望, リハビリテーション研究 47 (3), 10-15
- 5) 畠末憲子, 小嶋章吾 (2016): 地域包括ケア実現に向けた諸施策と IPW に資する経過記録の ICT 化 - ミクロ・メゾからマクロへの好循環が期待できる生活支援記録法, 地域ケアリング 18 (3), 107-110
- 6) 杉本浩章, 篠田道子, 上山崎悦代, 他 (2018): 緩和ケア病棟を有する病院における IPW の促進要因と阻害要因, ケアマネジメント学 16, 57-69
- 7) 松井由美子, 真柄彰, 遠藤和男, 他 (2010): 臨床実習施設における Interprofessional Work の現状と課題, 保健医療福祉連携 3 (1), 2-9
- 8) 高橋佳子, 佐々木裕子, 飯盛茂子 (2010): 臨床から在宅への退院支援 - 多職種の専門職者が重視した IPW (Inter Professional Work) の視点, 日本看護福祉学会誌 15 (2), 27-41
- 9) WHO (2010): Framework for action on interprofessional education and collaborative practice, WHO/HRH/HPN/10.3 ([https://www.who.int/hrh/resources/framework\\_action/en/](https://www.who.int/hrh/resources/framework_action/en/), 3. 11. 2019)
- 10) 酒井郁子, 宮崎美砂子, 山本利江 (2008): 千葉大学医療系学部基礎教育課程における専門職連携教育の取組み - 看護学部, 薬学部, 医学部必修教育プログラムの開発と実施, 千葉大学看護学部紀要 30, 49-55
- 11) 関谷弘毅 (2018): チーム基盤型学習 (TBL) において概念理解と学習意欲が形成されるプロセスの検討 - 英語教育学専門科目のアクティブ・ラーニング授業実践から, 大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要 (15), 93-110
- 12) 友野清文 (2015): ジグソー法の背景と思想 - 学校文化の変容のために, 学苑総合教育センター国際学科特集 895, 1-14
- 13) 金沢大学<グローバル>スタンダード (KUGS) (<https://www.kanazawa-u.ac.jp/education/distinctive/global>, 5. 5. 2019)
- 14) 樋口耕一 (2014): 社会調査のための計量テキスト分析 - 内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシヤ出版
- 15) 松田麗子, 大谷かがり, 堀井直子他 (2011): 成人看護学演習における演習補助者との連携教育 - KH Coder を用いた演習補助者のアンケートの分析から - 生命健康科学研究所紀要 18, 121-129
- 16) 内田真紀 (2016): テキストマイニングの臨床実習前学内演習教育評価への有効性の検討, 福井県立大学論集第 46 号, 13-21
- 17) 長野篤志, 池田直人, 脇山英靖, 他 (2012): ことばでつながる学び手を育む国語科学習の探求, 佐賀大学教育実践研究 28, 173-192
- 18) 楠見孝, 平山るみ, 田中優子 (2012): 批判的思考力を育成する大学初年次教育の実践と評価, 認知科学 19 (1), 69-82
- 19) 松本珠美 (2016): 人材育成分野から: 超高齢社会における公衆衛生看護の人材育成の推進, 保健医療科学 65 (1), 24-35
- 20) Itatani T, Nagata K, Yanagihara K, et al. (2017): Content analysis of student reports after attending a problem-based learning course - Facilitating the development of critical thinking and communication skills in Japanese nursing students. Health Care conditions of the Creative Commons Attribution (CC BY) license (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>)
- 21) 上田信行, 中原淳: インタラクティブ・ティーチングストーリーセッション 6- プロジェクト・ベースド・ラーニングからパッション・ベースド・ラーニングへ (<https://www.utokyofd.com/?mov=st-06>, 5. 5. 2019)
- 22) 上田信行, 中原淳 (2012): プレイフル・ラーニング, 三省堂

## An examination of Training in multidisciplinary collaboration and community-based cooperation with a focus on discharge coordination: Implementation of Active Learning

Kiyoko Yanagihara, Kana Minami, Akiko Tsuda, Rie Okamoto

### Abstract

The increasing complexity of clinical medicine and the reduction of hospitalization periods make it essential to provide education about support after a patient is discharged, taking into consideration multidisciplinary collaboration and community-based cooperation. While they first carried out introductory education for clinical practice for third-year students including team-based learning (TBL) with 5 cases focused on discharge coordination situations, and a poster tour (jigsaw method) .<incomplete/unclear?> This study examined the relations between classroom design and student learning, and analyzed the education contents.

The data used in this study were reports of 75 students and their responses to a self-administered questionnaire. We conducted quantitative text analysis using KH Coder [ver.3], and the survey responses were statistically aggregated.

Content analysis of the reports indicated the following: total number of sentences, 853; total number of paragraphs, 78; and number of extracted words, 33322. Of the extracted words, those that appeared most frequently were “patient” (*kanja*, 556 times) , “discharge” (*taiin*, 400 times) , “nursing” (*kango*, 330 times) , “support” (*shien*, 329 times) , “to think” (*kangaeru*, 326 times) , “type of occupation” (*shokushu*, 269 times) , “local region” (*chiiki*, 207 times) , “cooperation” (*renkei*, 202 times) , “lifestyle” (*seikatsu*, 188 times) , and “information” (*joho*, 114 times) . Furthermore, nursing-cooperation-local region-necessity formed one co-occurrence network, while patient-support-care and discharge-type of occupation-information were linked.

We used a concordance function to analyze in what context words seen as related to cooperation were used. The results indicated that the word “mediation” (*hashiwatashi*) was used for multidisciplinary mediation, mediation between hospital wards and local regions, and mediation between patients and their families. The word “match” (*awaseru*) was used in the sense of matching something to a person’s needs or situation, as well as in the sense of pooling efforts and collaborating. We extracted 143 instances of the word “case” (*jirei*) from the reports, and considering the prevalence of many specific names of professions, they appear to have been able to discuss multidisciplinary collaboration and community-based cooperation in a real and concrete way.

The survey results indicated that 100% of respondents were greatly interested or interested in multidisciplinary collaboration and community-based cooperation, and that 100% had a good understanding of it. Meanwhile, TBL self-monitoring indicated that respondents had acquired “the ability to discover issues and problems” and “the ability to propose issues and problems.” However, approximately 10% of responses stated that there was little acquisition of skills such as “discussion,” “the ability to create materials,” “presentation skills,” and “reflection.” Overall, we found the class design for TBL using cases focused on discharge coordination to be valid.